

2025 年度 札幌国際大学 奨励研究
報告書

カリキュラム改定にむけた
札幌国際大学らしいグローバルな視点をもった
教員養成のための基礎研究と授業改善
(中間報告)

基盤教育部・教職センター
安井政樹

2026 年 5 月

目次

第1部	オランダ教育視察	3
1.	オランダ教育機関視察（2025年8月23日～8月30日）	3
2.	視察の概要	3
3.	視察日程および訪問先 一覧	3
4.	各教育機関の視察報告	3
4.1.	BS De Hanevoet（イエナプラン公立小学校／8月25日視察）	3
4.2.	Grescollege（イエナプラン公立中高一貫校／8月26日視察）	6
4.3.	SintLucas（高等教育学校／8月27日視察）	8
4.4.	SALTO Montessori Trinoom（モンテッソーリ公立小学校／8月28日視察）	9
第2部	韓国教育視察	11
1.	韓国教育視察（2025年9月22日～9月23日）	11
2.	視察の概要	11
3.	視察日程および訪問先 一覧	12
4.	各教育機関の視察報告	12
4.1.	徳園中学校	12
4.2.	釜山国際高等学校	14
4.3.	南部メーカー教育体験センター	16
4.4.	恵化小学校	17
4.5.	SW・AI教育拠点センター	19
第3部	札幌国際大学における教育の特色化への展開	20
1.	海外教育視察を核とした教職課程の高度化	20
2.	クォーター制度・長期休暇を活用した柔軟なプログラム設計	20
3.	「体験・対話・省察」を軸とした国際教育の実践モデル	21
4.	札幌国際大学の「売り」としての海外教育視察の位置付け	21
	今後に向けて（中間総括）	21

第1部 オランダ教育視察

1. オランダ教育機関視察（2025年8月23日～8月30日）

本視察の主な目的は、オランダにおいて実践されている先進的な教育モデル、特にイエナプラン教育およびモンテッソーリ教育の理念と実践を、実際の教育現場を通して多角的に理解することにあった。

本視察では、初等教育から中等教育、さらに高等教育機関までを含む複数の教育機関を訪問し、学校説明、授業見学、生徒との交流、体験型ワークショップ、管理職・教職員との対話といった多層的なプログラムに参加した。これにより、単なる授業方法の視察に留まらず、学習環境の設計、教師と生徒の関係性、生徒の主体性の位置付け、学校文化そのものを包括的に捉える機会を得た。

2. 視察の概要

本視察では、オランダ国内における以下の教育機関を訪問した。行程は、教育段階および教育モデルの違いを比較可能な構成となっており、視察全体を通してオランダ教育を連続的なシステムとして理解すること、また、日本の教育との違いを感じることが教員養成の観点から、どのような効果があるかを検討することを目的とした。

3. 視察日程および訪問先 一覧

8月25日（月）	BS De Hanevoet	イエナプラン公立小学校
8月26日（火）	Grescollege	イエナプラン公立中高一貫校
8月27日（水）	SintLucas	高等教育学校
8月28日（木）	SALTO Montessori Trinoom	モンテッソーリ公立小学校

4. 各教育機関の視察報告

4.1. BS De Hanevoet（イエナプラン公立小学校／8月25日視察）

BS De Hanevoet は、イエナプラン教育を実践する公立小学校であり、初等教育段階における同教育モデルの具体的な実践を理解する上で重要な視察先であった。

当日の視察は、以下のように明確に構造化されたプログラムに基づいて進行した。

（1）校長（Maarten 氏）による学校説明

学校の教育理念、イエナプラン教育の位置付け、学校運営の考え方について、責任者自らが説明を行った。

（2）授業見学（2時間以上）

複数のクラスを対象に、理念が日常の授業実践としてどのように具現化されているかを継続的に観察した。

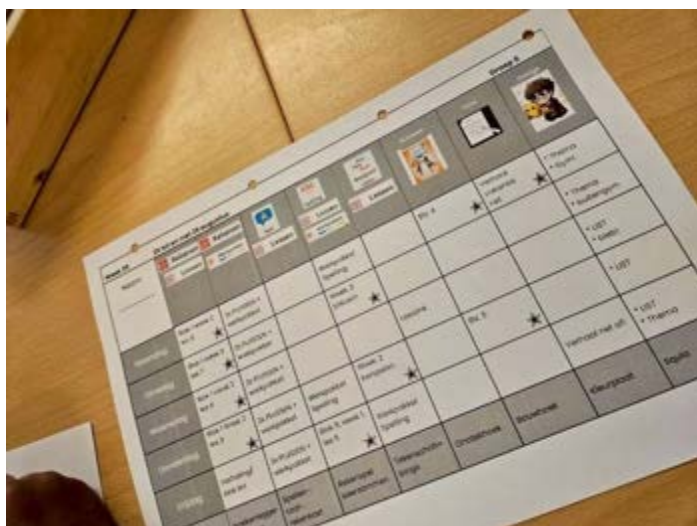
(3) 体験型ワークショップ

昼食後、「伝統的な遊び」「扇子作り」「名前とマグネット」「寿司づくり」などの活動を通じて、生徒と視察団が共同作業を行った。

校長とのダイアログ (Q&A・約 45 分)

観察・体験を踏まえ、教育理念や実践の背景について直接質問・対話を行う時間が設けられた。

この構成は、理念の理解 → 実践の観察 → 協働的体験 → 振り返りと対話という一連の学習プロセスを視察自体に内包しており、イエナプラン教育が重視する「経験と対話による学び」を視察者自身が体感できる設計であった。学生の視察の際もこのような現地の子どもたちのとのふれあいができる構成が重要であるとする。





4.2. Grescollege（イエナプラン公立中高一貫校／8月26日視察）

Grescollege の視察は、イエナプラン教育が中等教育段階においてどのように展開されているかを把握する機会となった。

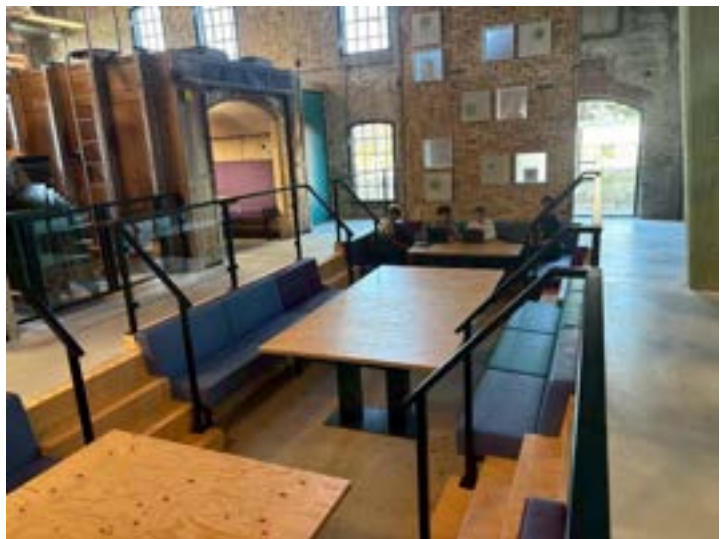
当日のプログラムは以下の通りである。

- (1) 管理職との顔合わせ
- (2) 教員と生徒による学校施設ツアー
- (3) グループ別授業見学
- (4) 管理職・教職員とのランチ
- (5) 異文化交流ワークショップ

特に注目すべき点は、学校施設の案内を生徒が教員と共に担っていたこと、および教職員とのランチが正式なプログラムとして組み込まれていたことである。これらは、生徒を学校運営の「当事者」として位置付け、上下関係に依存しないフラットなコミュニケーション文化を育てていることを示唆している。

また、14～15歳の生徒を対象としたワークショップでは、思春期段階にある生徒が主体的に活動に参加し、外部者と自然に関わる姿が観察された。





4.3. SintLucas（高等教育学校／8月27日視察）

8月27日には、高等教育機関である SintLucas を訪問した。本視察は、初等・中等教育に加え、専門性を重視する高等教育段階を含めることで、オランダの教育を発達段階に応じた連続的なシステムとして捉えることを意図した。

当日のプログラムは以下の通りである。

- （１）管理職との顔合わせ
- （２）教員による学校施設ツアー
- （３）学生のプレゼンテーション（この学校での自分の学び）

教育視察の枠組みに高等教育機関を組み込んだ点自体が、オランダにおける「学びの継続性」を重視する教育観を理解するうえで重要である。



4.4. SALTO Montessori Trinoom (モンテッソーリ公立小学校／8月28日視察)

SALTO Montessori Trinoom の視察では、モンテッソーリ教育の理念が、学校運営や交流プログラムの構成そのものに強く反映されていた。

プログラムの主な特徴は、以下の通りである。

(1) 生徒主導による学校紹介

小学6年生の生徒が主体となり、学校施設の案内を担当した。

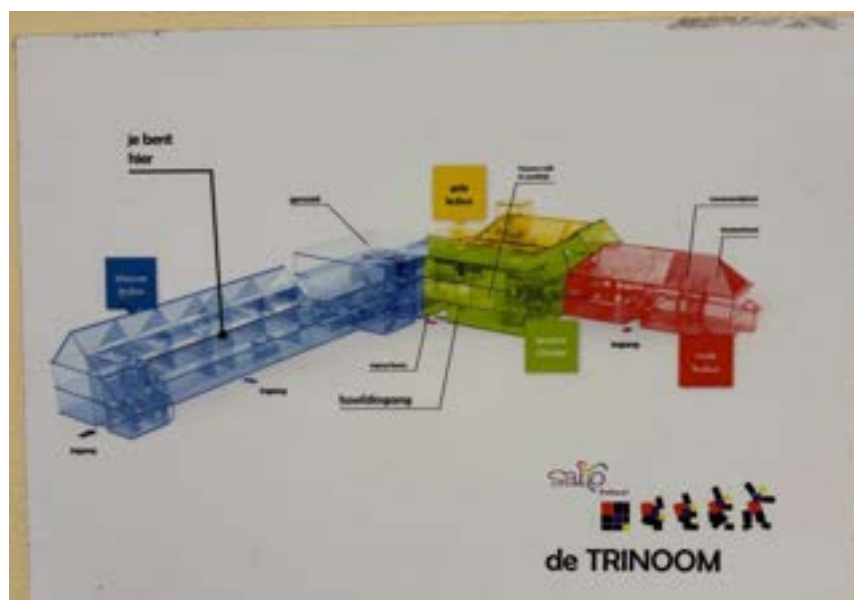
(2) 多層的な対話の機会

教職員との雑談、昼食、公式 Q&A と、形式の異なる対話の場が意図的に設けられていた。

(3) 午前・午後の複数回ワークショップ

より多くの生徒と継続的に関わる構成となっていた。

これらの設計から、同校が生徒の自律性とオープンなコミュニティ形成を教育活動の中核に据えていることが強く読み取れる。





第2部 韓国教育視察

1 韓国教育視察（2025年9月22日～9月23日）

本視察は、大韓民国・釜山広域市において実施した。視察対象は、中学校、国際高等学校、未来教育センター、私立小学校、SW・AI教育拠点センターであり、学校現場と教育支援施設の双方を訪問する構成であった。

視察の中心的な関心は、韓国におけるAI・デジタル教育の実装状況、ICT・SW・AI教育の学校内外での支援体制、国際教育と探究学習の展開、児童生徒支援および教員支援の仕組みを把握し、日本の教育実践・学校DX・AIリテラシー教育に生かすことである。

2 視察の概要

今回の視察では、釜山地域における教育DXの進展を、単なる端末整備やアプリ活用としてではなく、学習者が問いを立て、表現し、探究し、創造する学びを支える仕組みとして捉えることができた。韓国側の説明では、学校現場において「ICT教育」という表現よりも、「デジタル教育」や「AIの活用」という語が用いられる場面が増えており、児童生徒が端末を日常的に活用する文化が形成されつつある。

一方で、デジタル化が無制限に進められているわけではない。休み時間の端末管理、利用ルール、教員の裁量、自制を前提とした運用など、対面での関わりや学校生活とのバランスを取る工夫も確認された。また、生成AIについても、単に使用を禁止するのではなく、「どのように質問し、どのように答えを導くか」を重視する姿勢が示された。

釜山国際高等学校では、外国語教育、社会探究、国際フォーラム、寮生活、社会貢献活動が一体的に設計され、グローバル人材育成が学校文化として構築されていた。南部メーカー教育体験センターやSW・AI教育拠点センターでは、学校だけでは扱いにくい先端機器や専門的な体験プログラムを、教育庁・センター・外部人材が支援する構造が見られた。

本視察から、日本における学校DXやAI教育を考える際には、端末の使用率や教材のデジタル化だけでなく、授業設計、評価設計、教員研修、学校外リソースとの接続、児童生徒支援の分業体制を含めて検討する必要があることが示唆された。

3. 視察日程および訪問先 一覧

2025 年 9 月 22 日（月）	徳園中学校	自由学期制、AI・デジタル教育、教育情報化、校長・教頭との懇談
2025 年 9 月 22 日（月）	釜山国際高等学校	国際系列の特別目的高校、外国語教育、探究・国際交流、ICT・SW・AI 教育、学校生活
2025 年 9 月 23 日（火）	南部メーカー教育体験センター	メイカー教育、3D プリンティング、AR/VR、ロボット、学校外教育支援
2025 年 9 月 23 日（火）	恵化小学校	初等教育における特色教育、コーディング、ヌルボム学校、創意・特技教育、国際交流
2025 年 9 月 23 日（火）	SW・AI 教育拠点センター	VR・AI・ロボット体験、AI リテラシー、教員研修、学生体験プログラム

4. 各教育機関の視察報告

4.1 徳園中学校

徳園中学校は、1953 年創立の男子中学校であり、「愛し、清く、力を尽くして働こう」という校訓のもと、能力・人格・創造性を兼ね備えた健全な人材の育成を教育目標としている。教育情報化教育、AI 先導学校運営、「質問する学校」等で表彰歴を有しており、AI・デジタル教育に関する取り組みを進めてきた学校として位置づけられる。

視察時には、中間試験期間中であつたため、授業参観や長時間の滞在ではなく、施設見学および校長・教頭との懇談を中心に進められた。説明では、韓国の自由学期制にも触れられた。自由学期制は、中学校 1 年または 2 年のうち 1 学期を対象に、定期試験を実施せず、体験学習・職業探求・自己探究など多様な学習を経験する制度である。

意見交換では、韓国側から、7 年ほど前から AI やデジタル関係の授業を進めていること、AI デジタル教科書の導入が進んでいることが説明された。日本側からは、デジタル教科書が広がりにくい背景として、直接体験や実験、実物を見ることを重視する授業文化があることを共有した。ここから、日韓の差は単純な先進・遅れではなく、授業観や学習観の違いとして理解する必要がある。

生成 AI の扱いについては、韓国側から「最も大切なのは、どう質問し、どう答えを導くかである」との見解が示された。AI の使用可・不可を適切に設計し、問いの立て方や過程を評価することで、AI 活用は学びを代替するものではなく、思考を深める契機になり得るという示唆が得られた。

また、児童生徒の心身の状態をデジタルで把握する取り組み、学校内の端末利用ルール、サイバーブルーイングへの対応、情報リテラシー教育、教員採用時の ICT 活用能力の評価、スクールカウンセラー等の支援体制についても意見交換が行われた。特に、教員がすべての生徒指導・トラブル対応を抱え込むのではなく、管理職、教育庁、専門スタッフが支える仕組みがある点は、日本の学校運営にとって重要である。



4.2 釜山国際高等学校

釜山国際高等学校（Busan International High School, BIHS）は、1998年に設立された韓国初の「国際系列」公立特別目的高等学校である。国際・外国語系列の専門科目を72単位以上自由選択・履修する特色を有し、社会探究方法、課題研究、Creative Art Lab、International Salon、BIHS Global Forum & Global Week など、外国語教育と探究・発表活動を組み合わせた教育課程が整えられている。

同校の教育理念は、学校の象徴であるアルバトロスと、「目を世界に、胸には夢を向く」というスローガンに表れている。教育目標 B.I.H.S.には、有望な人材、国際性、21世紀に求められる核心的能力、社会貢献が込められており、グローバルな社会で活躍し、社会に貢献できる人材の育成が目指されている。

学校生活では、寮生活、放課後プログラム、夜間自習、質の高い給食、多様な第二外国語選択が特徴として説明された。授業は8時40分から始まり、通常授業後には多様なプログラムが用意されている。夜間自習については、1・2年生は18時50分から21時、3年生は22時30分まで設定されている一方、塾通いや体調不良等には柔軟な対応も認められている。

校長・副校長・教務主任との懇談では、同校が韓国初の公立国際高校として約30年の歴史を持ち、卒業生が国内外の有名大学や外交関連分野に進んでいることが共有された。また、日本との交流実績として、筑波大学附属駒場高等学校、神戸国際高等学校、奈良女子大学附属中等教育学校、大阪府立天王寺高等学校等との関係が紹介された。今後、日本から20名を受け入れ、翌年に韓国から20名を日本へ派遣する交換プログラム構想も示された。

日韓比較の観点では、韓国の公立学校では教員が3～7年、校長が4年程度で異動すること、韓国では個性を尊重する傾向が強く、服装や髪型の自由が保障されていること、小学3年生から高校3年生まで全生徒にiPadが配布されていることなどが説明された。日本については、他人に迷惑をかけない文化や規則を守る態度が評価される一方、IT・AI活用の遅れや、協調性重視による個性発揮の難しさが課題として指摘された。





<과학실 사용 시간표>

교사	월	화	수	목	금
1	1-1(중과) 1-4(중과)	1-4(중과)	2-1(영과) 2-5(영과) 1-5(중과)		2-1(영과) 2-4(영과)
2	2-6(영과) 2-8(영과)	1-3(중과) 2-2(영과) 2-3(영과)	2-8(영과)		2-6(영과) 2-7(영과)
3	1-2(중과) 1-3(중과) 2-2(영과)	1-1(중과) 2-1(영과) 2-5(영과)	1-7(중과) 2-8(영과) 2-2(영과)	1-5(중과) 2-1(영과) 2-2(영과)	1-5(중과) 1-6(중과)
4	2-7(영과)		1-2(중과) 1-8(중과) 2-4(영과) 2-7(영과)	2-3(영과) 2-6(영과)	1-3(중과)
5	1-6(중과) 1-8(중과)	2-7(영과) 2-8(영과)		1-2(중과) 1-6(중과)	1-4(중과) 2-4(영과) 2-5(영과)
6			1-7(중과) 2-3(영과) 1-8(중과) 2-4(영과) 2-6(영과)	1-1(중과)	2-2(영과) 2-3(영과)
7		1-5(중과)			1-7(중과)

부산국제고 학교운영

구분	시간
기성	08:10~
조식	07:00~08:00(0)
통교	08:00~08:30(0)
조례	08:30~08:40(0)
1교시	08:40~09:10
2교시	09:40~10:10
3교시	10:40~11:10
4교시	11:40~12:10
점식	12:30~12:50(0)
4교시	13:30~14:00
점식	14:30~14:50(0)
5교시	15:20~15:50
6교시	16:20~16:50
7교시	17:20~17:50
평과후	18:40~19:00(0)
석식	19:00~19:30(0)
자습1	19:30~19:50(0)
자습2	20:00~21:00(0)
자습3	21:20~22:30(70)
입사	21:00~22:00
잠호	22:40~24:00
취침	24:00~06:00
소통	01:00

4.3 南部メーカー教育体験センター

南部メーカー教育体験センターは、2021年12月に開館した未来教育センターであり、旧ヨンポ小学校を活用して設立された。科学技術と芸術文化を融合した多様な施設を備え、3Dプリンティング、ロボット制作、コーディング、木工、ドローン、AR/VR等のメイカー教育プログラムを開発・運営している。

同センターの特徴は、単に知識を学ぶのではなく、実際に手を動かして作り、試行錯誤し、発表するプロセスを通じて創造力を育成する点にある。大型3Dプリンター室、ドローン室、レゴプレイグラウンド、AR/VR室などの教室が整えられており、学校では日常的に扱いにくい先端機器を体験できる環境が用意されている。

音声記録の整理版では、センターの役割として、児童生徒への体験学習、部活動支援、教員向け研修・セミナーの3点が示されている。常勤スタッフは約3名で、外部講師として企業・大学・教員等が関わる。学校単位の利用に加え、夏休み等の個人参加型プログラム、地域拠点でのメイカー教室、学校への出前授業、機材貸出も行われている。

この施設からは、STEAM教育や探究学習を学校内だけで完結させない仕組みの重要性が見えた。日本でも、学校にすべての機材や専門性を求めるのではなく、教育センター、大学、企業、地域施設が連携し、学校が必要なときに利用できる「学びのインフラ」を整えることが求められる。



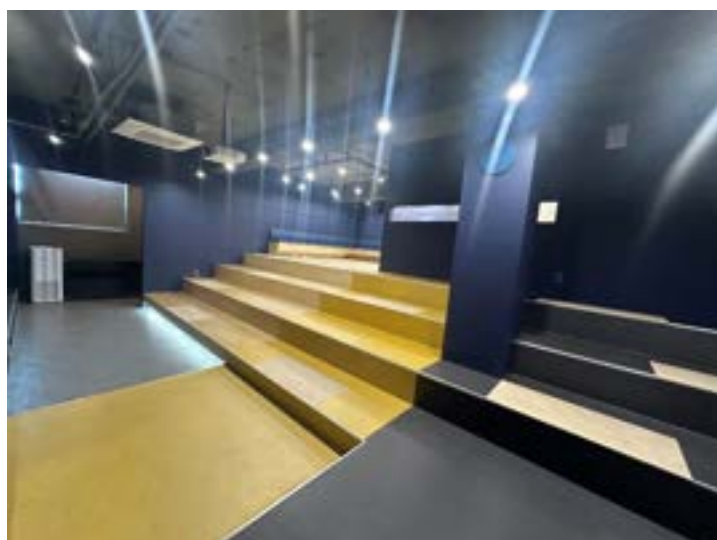
4.4 恵化小学校

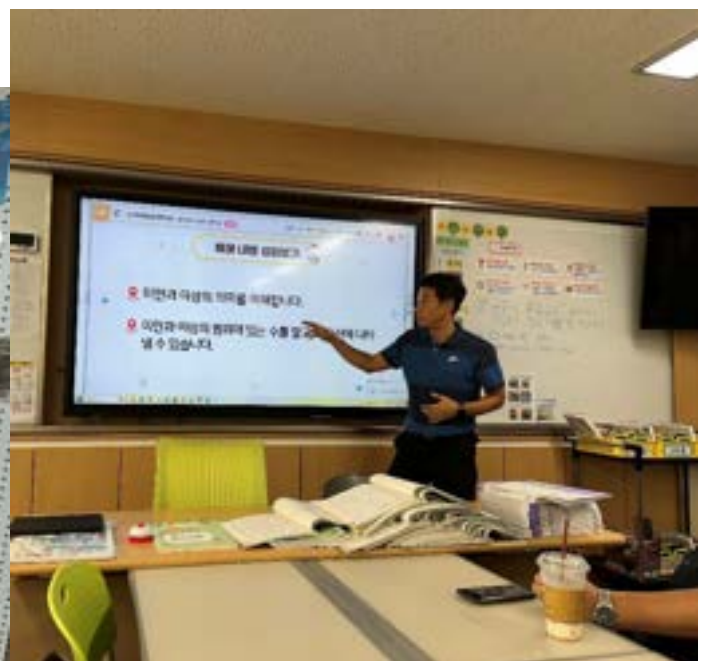
恵化小学校は、1965 年に開校した釜山を代表する私立小学校の一つであり、女子 178 名、男子 160 名が在籍している。教科の特色教育として、美術、茶道、漢字、国楽、読書、音楽、体育、コーディング、器楽などを強化している。

同校では、「ヌルボム学校」プログラムとして、バイオリン、チェロ、フルート、打楽器、ウェブトゥーン、AI ロボットコーディング、ドローン、ダンスなど、多様な創意・特技教育が実施されている。また、オーケストラ、重唱団、アイスホッケー、フットサルなど、芸術・スポーツ活動の幅も広い。高学年を対象としたコーディングクラブや、国際交流プログラムによるグローバル能力の育成も行われている。

この小学校の視察からは、初等段階における教育の幅広さが確認できる。AI・ロボット・ドローン・コーディングといったデジタル領域が、芸術、音楽、体育、国際交流と分断されず、子どもの興味や得意を入口として学びを広げる構造が見られる。

日本においても、初等段階の AI・プログラミング教育を、技術習得だけに閉じるのではなく、表現、協働、身体活動、文化理解、国際交流と接続することが重要である。子どもが「好き」「やってみたい」と感じる活動を通じて、デジタル技術を自然に活用する学習環境を設計する必要がある。





4.5 SW・AI 教育拠点センター

SW・AI 教育拠点センターは、釜山広域市教育庁が廃校となった徳川女子中学校をリモデリングして整備したデジタル体験空間である。地上 4 階、約 7,225 m²の規模を有し、VR、AI、ロボット等の多様なデジタル体験が可能な施設として位置づけられている。

同センターは、釜山広域市教育庁のデジタル教育中核施設群の一つであり、ソフトウェア教育、AI リテラシー、教員研修、学生体験プログラムなどを展開している。学校単位では整備が難しい大規模な体験環境を、教育庁の拠点施設として提供することで、児童生徒の学習機会と教員の研修機会を支えている。

この施設は、廃校施設の再活用という点でも示唆的である。地域の教育資源を再編し、AI・デジタル教育の拠点として再生することで、学校外に学びの選択肢を広げている。日本においても、閉校・統合後の学校施設や教育センターを、AI リテラシー、STEAM、探究、教員研修の拠点として活用する可能性がある。

また、教育 DX を進める際には、各学校にすべてを任せるのではなく、自治体・教育委員会が拠点を整備し、教員研修、児童生徒向け体験、教材開発、外部人材との接続を担うことが重要である。韓国の事例は、学校現場の努力と教育庁のインフラ整備が連動することで、実践の広がりが生まれることを示している。



第3部 札幌国際大学における教育の特色化への展開

本教育機関視察で得られた知見は、札幌国際大学における教育の特色化、とりわけ教職課程および国際的視点を取り入れた学びの充実に大きく寄与するものである。本章では、本視察の成果を本学の教育プログラムにどのように接続し、大学としての強みとして展開し得るかについて整理する。

1 海外教育視察を核とした教職課程の高度化

本視察を通して、学生が海外の教育現場を直接体験することは、日本の教育を相対化して捉える視点を育成する上で極めて有効であることが明らかとなった。特に、オランダの学校における

- ・生徒の主体性を前提とした学校運営
- ・教師と生徒のフラットな関係性
- ・学習環境（空間・時間・活動設計）と学びの質の密接な関係

を実地で観察することは、教職志望学生にとって、教育観そのものを再構築する学習経験となる。

また、韓国の教育現場では

- ・最新の ICT 教育
- ・学校や社会の DX の現状
- ・AI 教育の最前線等

を知ることができ。また、単に学校に ICT 機器を導入している点ではなく、デジタルを「学習者が表現し、探究し、創造するための基盤」として位置づけ、学校外の教育センターや教育庁の支援機能と接続しながら運用している。

今後のデジタル文系人材育成を目指す本学の教育という観点からも、よい視察先となることが想定される。

これらの要素を踏まえ、本学教職課程においては、従来の理論中心の学びに加え、海外教育視察を位置付けた演習型科目を導入することで、「比較を通して教育を考える力」「現場を批判的に捉える視点」を育成することが可能である。

2. クォーター制度・長期休暇を活用した柔軟なプログラム設計

札幌国際大学が有するクォーター制度や長期休暇の柔軟性は、海外教育視察を正規教育に組み込みやすい制度的強みである。本視察で確認された現地校との継続的な受け入れ可能性を踏まえれば、夏季休暇等を活用した短期集中型の海外演習プログラムの実施が現実的である。

具体的には、

渡航前：事前学習（教育制度・教育モデル・文化理解）

渡航中：授業参観、学校説明、生徒交流、体験型ワークショップ

帰国後：振り返り、比較分析、レポート作成

といった一連の学習過程を科目として構造化することで、単なる研修旅行ではなく、単位化可能な正課教育プログラムとして展開することができる。

3. 「体験・対話・省察」を軸とした国際教育の実践モデル

本視察で共5して確認されたのは、体験型活動と対話、そして省察（リフレクション）が意図的に組み込まれた教育実践であった。この構造は、本学が目指す「実践知を伴った学び」「社会とつながる教育」と高い親和性をもつ。この視察が、本学での学びの充実にもつながると考えられる。

特に、「生徒と共同で行うワークショップ」「教職員との公式・非公式な対話」「学校文化そのものを学習対象とする視点」は、本学における国際教育・教職教育の質を高める上で重要な要素である。海外教育視察を通して、学生自身が「学びの主体」となり、問いを立て、対話を通して理解を深める経験は、本学の教育理念を体現する実践例となり得る。

4. 札幌国際大学の「売り」としての海外教育視察の位置付け

札幌国際大学の教職課程におけるオランダ教育機関視察は、「教職課程の特色化」「国際的視野をもつ人材育成」「実践と理論を往還する学習モデル」を具体化する上で、有効な基盤を提供するものであると結論づけられる。今後、協力体制を継続的に構築し、制度設計・安全管理・評価方法を整備することで、本学ならではの海外教育演習プログラムとして確立していくことが期待される。

今後に向けて（中間総括）

教育機関視察は、各校の教育実践を通して、教育理念が学校文化や日常の営みにどのように具現化されるかを実感的に理解する貴重な機会となった。重要なのは、手法の表層的な模倣ではなく、その根底にある思想を読み取り、日本の教育的・文化的文脈に即して再構成するうえで、重要であると考えられる。

一方、この視察は、体験的で学生にとっても有意義なものになる可能性が高い一方で、旅費が高騰しており、宿泊費や食費等も高騰しているため経費が高いことが懸念点としてあげられる。

オランダにおいては、学校施設自体が協働的な学びを展開しやすい構造になっており、授業においても、個別最適な教育が行われていることなどから、日本のこれからの教育について考える際においても、大変乳意義な学びを得ることができると考える。

一方、韓国においては、最先端のICTの学習環境を知ることができ、デジタル学習基盤を用いた教育DXという我が国の教育の今後について学ぶことができると考えられる。

韓国の教育DXは、端末やアプリの導入だけでなく、学校文化、評価設計、教育庁の支援施設、教員研修、児童生徒支援と結びついて進められていることが確認できた。特に、AIやデジタルを「子どもが考えなくなるもの」として一律に警戒するのではなく、問いの立て方、成果物の検討、表現・発表、フィードバックの質を高めるための環境として位置づける視点が重要である。

日本の教育に生かす際には、韓国の制度やスピード感をそのまま移植するのではなく、日本が重視してきた直接体験、対面での関わり、丁寧な基礎・基本の指導と、AI・デジタルによる探究・表現・創造の支援をどのように組み合わせるかが課題となる。

学生の経済的、時間的な負担を考慮し、韓国における教育視察が実現可能性が高いと判断し、次年度は、実際の試行を行った上で、教職課程における学生の学び成果と課題を整理し、R9年度からの新課程における本学の魅力向上、学生募集へとつなげていきたい。